中山間地域に大学を創設する

加賀山 茂

「中山間（ちゅうさんかん）地域」とは，農業地域類型区分のうち，中間農業地域と山間農業地域を合わせた地域をいう。山地の多い日本では，このような中山間地域が総土地面積の約 7 割を占めており，この中山間地域における農業は，全国の耕地面積の約 4 割，総農家数の約 4 割を占めるなど，我が国農業の中で重要な位置を占めている。

このような中山間地域では，少子高齢化が顕著に進んでいる。特に，少子化の進行によって貴重な人材となるべき若者が地域から都市へ向けて大量に流出している。この地域の特色は，人口動態を示すグラフを見るとよくわかる。すなわち，18 歳～30 歳の人口が極端に減少している。その原因の多くは，地域の近くに大学がないため，若者が都会へと流出するからである。しかも一度流出した若者は，都会で就職してしまうので，なかなか地域に帰ってこない。

このような中山間地区における若者の域外流出を食い止めるためには，若者にとって魅力のある大学を知的交流のプラットフォームとしてデジタルツイン（実世界の情報を IoT の活用にってリアルタイムでサイバー空間に送り，サイバー空間内に実世界の人，モノ，環境を再現するもの）として創設すればよい。日本建築学会のスローガンでいえば，「まちのようにキャンパスをつくり，キャンパスのようにまちをつかう」ことにすればよいのである。ところが，少子高齢化が進行する現状においては，都市部でさえも大学を維持するのが困難となっており，中山間地域に大学を創立するのは至難の業である。

筆者は，定年退職した後，大学のない中山間地域に住むことになり，若者の域外流出という現実に直面し，この地域に適合した大学を創設するには，どれ程の経費が必要なのかを調査することになった。

確かに，中山間地域に住民の知的交流の場として魅力のある大学を創設するのは至難の業であるが，成功例がないわけではない。中央から遠く離れた秋田県の郊外に 2004 年に設立された国際教養大学は，その例外的な成功例である。この大学の成功の秘密は，従来の大学ではまねのできない，若者の心をつかまえる以下の戦略を大胆に採用したからである。

１．授業はすべて英語で行っている。
２．1 クラス 15 人程度の少人数教育を徹底して行っている。
３．新入生は，外国人留学生とともに 1 年間寮生活を経験する。
４．在学中に 1 年間の海外留学を義務化している。
５．専任教員はすべて公募であり，その結果，半数以上が外国人である。
６．卒業要件が厳格で，ストレートで卒業できる学生は半数に満たない。
７．図書館は，365 日 24 時間で開館している。

これほど明確で大胆な特色を出すことは，伝統ある大学では，ほとんど不可能である。したがって，国際教養大学だけでなく，このような特色ある大学を設立することができれば，

既存の大学との競争には打ち勝つことも可能であろう。

さらに，持続的な発展を推奨する SDGs が高く評価されるようになり，コロナ禍を経験して，都市生活の危険性が明らかになった現状においては，中山間地区に大学を設立するのに有利な条件が以下のように生み出されつつある。

１．コロナ禍を経験することによって発展したリモート授業，対面とリモートのハイブリッド授業を行うことによって，中山間地域にとって不利な条件とされてきた，交通の不便を克服できる。

２．SDGs が提唱する「誰一人取り残されない」，新学習指導要領のいう「個別最適化」教育の実現という目標に即して，個々の学生の将来設計に即して，個々の学生に適したカリキュラムを選択的に編成することによって，社会に有用な人材を育成することが可能である。

３．AI 翻訳等の発展によって，すべての授業を英語で行わなくても，個々の学生の言語を自動的に英語と日本語に自動的に翻訳し，望む言語で授業を受けることが可能になりつつある。

このようにして，現在では，国際教養大学が行っている特色の多くの部分を，第 1 にハイブリッド授業の活用，第 2 に個別最適化を実現するカリキュラムの設定，第 3 に AI の活用を通じて，以前と比較すると，かなりの低価格で実現できる条件が整いつつある。

残された問題は，大学の設立と運営に必要な予算を支弁することが，少子高齢化に直面する中山間地域においては，困難であるという点にある。

しかし，少子化と若者の域外流出に対する適切な対策を講じなければ，その地域の自治体は消滅せざるを得ない。特色ある設立・運営した場合の経済効果を試算し，損益分岐点を考慮して，採算の合うところから小規模の大学を設立する試みを開始すべきであろう。

筆者は，法と経営学会の第 2 分科会（地方創生と DX）の座長として，中山間地域の創成のための理論的研究を進めており，理論と実務を架橋するための試みを徐々に実践に移しつつある。この実践がある程度成功した段階で，その顛末を報告したいと考えている。